

イネの秕に似た果実を付ける植物で、河川の湿った粘土質を多く含んだ砂地、低地の湖沼の周辺部のやや滞水地域や水田の畔などに生育する多年草である。(中略) エゾノサヤヌカグサは、稈は細くて高さは八〇センチに達し、稈の節はふくらみ、逆向きの剛毛がある。葉はサヤヌカグサ属の中ではもっとも長く、二五センチに達する。乾くと内側に曲り、葉の表面はざらつく。(中略) 小穂は扁平であり、イネの小穂に良く似ているが、熟してもイネのように太らないで、平たいままである。小穂の縁には長い剛毛があり、縁以外のところにも剛毛が生えているのでざらつく。植物全体がざらつく感じである。(後略)

田畑の草種

大葉子・車前草 (オオバコ)

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての激動期を生きた藤原定家は、小倉百人一首の選者として知られ、多くの和歌集や歌論に残している。さらには「明月記」という記録を残しているが、これは定家が80年の生涯のうち19歳から74歳までの56年間にわたって日常の雑事や世間の動向、流星群やオーロラの発生などの自然現象まで記載した貴重な日記資料である。

その日記の中には定家自身の健康状態についても縷々記載されている。記載内容を見ると、定家はまるで病の見本市のように各種の病に罹患している。病は「はしか」「疱疹」に始まり、「気管支喘息」「関節リウマチ」「尿路結石」「マラリア」「虫歯」「腰痛」「糖尿病」、年老いてからは「老眼」にも苦しんだようであるが、これは「緑内障」や「白内障」であったのかもしれない。

そんな定家が35歳の時にこんな記載がある。足に小瘡(小さなおでき)ができたので医師を呼んでみせると「頗るすこぶむづかし物に似たり、懈怠けだい無く薬を付く可き之由」といって薬を処方した。その時の薬が「目ハジキ也」と注書きにあるが、「メハジキ」はシソ科メハジキ属の薬草ではあるが、一般には産前産後などの女性用保健薬として使われていたようである。それを定家は処方されたようであるが2、3日たっても効かなかった。すると医師は「今に於いては車前草しゃぜんそうを押し付く可し」というので今度はそれに従った。しかし2日たっても効果がなかったのでこれもやめてしまった。この時に処方された「車前草」がオオバコである。オオバコは、その成熟種子を「車前子しゃぜんし」、全草を乾燥したものを「車前草」、葉だけを乾燥させたものを「車前葉しゃぜんよう」といい、いずれも通常は煎じて用いられる。一方で、民間療法として腫れ物に葉を火であぶって揉んでから貼り付けると効果があるといわれるが、定家の受けた処方はいずれも貼付したものではない。

オオバコはオオバコ科オオバコ属の多年草。全国の高地から平地までの、日当たりの良い野原や荒地、畦畔や道端などに

新規成分の除草剤の開発・普及で移植水田でのエゾノサヤヌカグサを容易に防除できるようになった北海道では、増加傾向にある乾田直播水田で再び問題雑草のひとつに挙げられているようだ。東北地方の乾田直播水田にも生育する(図-6)ので、稲作形態の変化に伴うエゾノサヤヌカグサの動態の変化を名実一体として注視していただきたい。

須藤 健一

ごく普通に自生する。踏みつけに強く人や車などが多く通り、硬くなった地面などでよく見られ、高くなる草が生えるようなところでは自然に絶えてしまう。

葉はすべて根生葉で放射状に四方に広がり、長さ4-15cm、幅3-8cmほどの卵形または広卵形。3-7本の葉脈が目立ち、葉面が波打っているものも多い。花期は春から秋、根生葉の間から10-30cmほどの長さの花茎を数本伸ばし、小さな花を穂状にびっしりと付ける。花は雌性先熟で花序の下の方から順に雌蕊が顔を出し、受精した後雌蕊が萎れると、続いて長くて白い雄蕊が出てくる。1つの花穂を下から見れば一番下に果実の付いた花、その上に雄蕊の付いた花、雌蕊の付いた花があり、一番上にまだ開いていない蕾があり、それらが同居している。

種子は湿るとゼリー状の粘液を出してべたつき、動物や車輪、靴などについて遠くへと分布を広げていく。山で道に迷ったとき、オオバコを見つけたら人が通った証拠だからオオバコに沿って行けば元に戻れる、などともいわれる。富士山の5合目にも広がっている。

